

# フォレストニュース

植林が地球を救う

令和6年(2024)1月10日

No. 192

発行 高津啓洋

## 苗を植え始めてから24年目のご挨拶

「地球の緑を守る会」がレダ現地で植樹を始めたのは今から23年前の2001年4月でした。パンタナールの南部に位置するレダの土地は、ほぼ全域が粘土質であるため、日本国内で普通に木を植えるやり方は通用しませんでした。未知の環境での森づくりは、すべてが“実験を兼ねた本番”という形になりました。植える樹種もできる限り多種類準備し、その生育状況を調査するという方法をとりました。

パラグアイやブラジルの日系人の間で“南米桜”といわれるイペーをはじめ、チバト、ジャカラнда、パラトード、ゴールドンシャワー、ニーム、パライソ、ユーカリなど15種類、果樹もマンゴー、アボカド、グレープフルーツ、バナナ、パイヤ、グアバ、アセロラなど10種類ほど試しました。

20年以上経った今、結果を見ると、ニーム（インド原産、セ

ンダンの仲間）は6～7m、ユーカリは10～12m、イペー（パラグアイでの呼称はラパーチョ）は5～6mに育っています。果樹で一番よく実をつけたのはマンゴーでした。アセロラも低木ですが、たくさん実をつけます。現在はブルーベリーなども育てているようです。

### 今年からの新しいプロジェクト

2001年～2007年の最初の7年間にちょうど2千本の苗木を植えました。これらは草創期開拓者の皆様と当会の会員の皆様が、レダの聖地に森を再生するための基礎となる記念樹として植えられたものです。したがって、一本一本、木と木の間隔を空けて植える従来型の植栽でした。

また、国内では当会の八つの支部がこの20年間、会員の皆さんと植樹活動を継続し、国外ではパラグアイのレダ基地内をはじめ、周辺のインディヒナ（先住民）の村々、

首都アスンシオン、および東部の都市シウダデルエステなど、パラグアイの各所に植樹を継続してきました。その結果、昨年2023年までに、累計16万4,326本植えることができました。地球の生態系に最もダメージを与えるのは、合法・非合法の森林伐採、および世界各地で継続的に起きる大規模火災による急速な森林減少です。当会の植樹本数はそれこそ“焼け石に水”とっていいものですが、「今、一人一人が木を植えなければ地球

を救うことができない！」という“叫び”だと考えていただければいいと思います。その意味で、23年間の実績は、会員の皆様の並々ならぬご尽力の賜物と思い、心から感謝しています！

今年からは新たな取り組みとして、土地本来の樹種（ケブラッチョ、パロサント、アルガロボ、パロボラーチョなど）による《混植・密植》（宮脇方式）の森づくりを計画しています。どうかこれまで以上のご協力をお願い申し上げます。

